

古典作品を楽しく読み味わうための試み 「徒然草」～ちょっと残念な人々～

The attempt to enjoy and appreciate classical literature

“Tsuzuregusa” ~ about the people in a little disgrace ~

国語科 市川 千恵美

要 旨

本実践は古典に対して抱きがちな「古語だから難しい」といった抵抗感をなくし、現代の作品を読むのと同じような感覚で、読み物としてその面白さを楽しんで、読み味わえるように試みた取り組みである。「徒然草」の中から「クスッと笑えるようなちょっと残念な人物」という視点で中学生が楽しんで読めるような六つの章段を題材として選定し「徒然草～ちょっと残念な人々～」を単元名とした。それぞれの話のおかしさ、愚かさの特徴を読み比べ、生徒自身の読みの視点と根拠で話し合い活動・交流を通してどの人物が一番残念な人かを決めるというものである。こうした活動の後には、なぜ兼好がこうした人物を書いたのかといった作者の思いを考えていくことも目ざしている。古典という枠を超えて作品の面白さを実感したり、作者の生きる姿勢や考え方に共感したりということができれば、作品の読みも深まり、古典の印象も良いものとなることが期待される。また、それは今後の古典学習へ意欲にもつながることが期待される。

キーワード：楽しんで読み味わう 現代文と同じ感覚 題材の選定 読みの視点と根拠
話し合い・交流

I はじめに

作品として親しんだり面白さを味わったりすることに徹しきれない、やや中途半端な古典の扱いという中学校の現状がある。学習指導要領では古典作品について「作品に親しむ」「作品に表れたものの見方・考え方に触れ、作者の思いを想像する」という二つの目標が掲げられているが、音読をしっかりとすることや、どんなことが書かれているかといった内容の解読にかかる比重が大きくなりがちで、そこに表れている考え方や思いに至るまでには十分にできないことが多い。その反面、高校入試ではある程度、語釈や現代語訳が必要とされる問題も出題されるため、解釈的なことも中学の授業でも必要ということで、指導要領では、あくまでも「古典に親しみが持てるようにすること」をねらいとしていてもそこにだけ徹しきれず、やや中途半端な古典の扱いとなるのである。加えて教科書では、長い作品の一つか二つの章段が取り上げられているだけのことが多く、作品全体として見たり、作品に表れている作者の思いや考えといった作品そのものを現代の作品と同じように読み味わいにくい状況もある。

そんな中、「言葉が違う」「わかりにくい」といった点から、古典に対してマイナスのイメージを持ってしまったり、抵抗を感じたりしている生徒も少なくない。中学校の段階で「古典が苦手・つまらない」といった意識をもってしまうと、高校ではさらに困難になってしまうことが容易に予想できる。それは阻止したいところである。

一方、「徒然草」という作品は古典の中学・高校では定番の古典教材であるが、教科書に取り上げ

られる章段もまた定番で、必ず冒頭と多くは「仁和寺にある法師」である。作者兼好は、多面的に客観的に物事をとらえ、既成の概念や権力によらず自身の目で世の中を見ようとした人であり、かつウイットに富んだ風刺的な視点も持ち合わせている。隠者といっても諦観というより、無常であるからこそ生きている今を大切にするとといった生きることに前向きな姿勢がうかがえ、現代にも通じ、共感できる場所が多々ある。だが教科書にあるこの二つの章を読んだだけで「徒然草」という作品の面白さや作者兼好の考え方などに触れることは難しいと考えられる。ややもすると「ちょっと気難しい感じのする退屈な文章」という否定的なイメージをもちかねない。

そこで、本単元では、古典という枠を超えて「作品に親しみ、作品としての面白さを実感する」ことに徹し、題材の選定や学習活動に工夫をすることで、古典の「徒然草」という作品が退屈でつまらないものでなく、魅力的なものだと感じられるようにすることに焦点をおいた。古典に対して作品として読む楽しさや魅力を少しでも感じられる体験をすれば、これからの古典の学習へ肯定的で意欲的な姿勢がもてるであろう。

Ⅱ 単元の構想

1 学習のねらい

生徒が意欲的に取り組めそうな題材の選定や、学習活動にゲーム的な要素を仕込むといった工夫によって、古典の言葉への抵抗や「徒然草」という作品への抵抗を除去し、現代文と同じような感覚で楽しんで読み味わいながら、作品に表れた見方・考え方に迫っていくことをめざして本単元を設定した。以下の三つを本単元の学習のねらいとする。

- ① 古典の作品を、現代の作品を読むのと同じように、読み物として楽しんで読む態度を養う。
- ② 「徒然草」のいくつかの章段の話と比較して読み、人物像や話の特徴をとらえ、古典作品に表れたものの見方・考え方に触れ、作者の思いを想像する。
- ③ どの話が最も残念かという視点で話し合い、互いの捉え方や考えを交流し、読みを深めたり、広げたりする。

【伝統的な言語文化ア（ア）（イ）・A話すこと・聞くこと(1)オ】

2 対象と実態

お茶の水女子大学附属中学校 平成28年度 第二学年 4クラスを対象生徒とする。

2年生時の古典の学習については、本単元は10月に実施したもののだが、夏休み前に生徒たちは「枕草子」を読み、「春はあけぼの」段を「現代版（私家版）枕草子」に書き換えるという活動に取り組んだ。この創作的な活動に楽しんで取り組む姿勢が見られ、また「枕草子」の暗唱にもよく取り組み、古文の音読もよくできている。普段から日常的に俳句の紹介や百人一首を覚えることを課していたりもするので「古典に親しむ」素地は比較的できていると思われるが、現代文に比べ「古典の文章はわかりにくい」「同じ日本語と思えない」といった意識を持って、古典というとやや引き気味になる生徒も少なくはない。

3 工夫点

(1) 楽しんで意欲的に取り組めるための題材の選定と準備

「徒然草」を一つの作品として「現代の作品を読むのと同じように、読み物として楽しんで読む」ために、何らかのテーマを決めて興味を持って読めそうな章段を集めるという複数の題材の選定に最も心を砕いた。「徒然草」の冒頭の部分だけで一般的に持たれがちな「気難しい・堅い・退屈」とイメー

ジを払拭し、「意外と面白い」「兼好さんてそんな人だったんだ」ということが感じられよう、「クスツと笑えるようなちょっと残念な人物」というテーマはすぐに決まったが、このテーマにふさわしいものとして全 243 段の中からいかにして選ぶか、参考になりそうな文献を見て、そういう話の章段をリストアップしたり、実際に読み直して選んだりと試行錯誤した。兼好は「徒然草」の中で僧侶のような世間的には権威があり立派だったと思われていた人たちを風刺的に多く取り上げられているので、僧侶の出てくるものを中心に集めることにした。クスツと笑えそうであっても、話が長すぎたり、内容的に当時の社会や人間関係の在り方がかなり詳細にわかっていないと理解できないようなもの、例えば僧侶の間での男色が前提とした話だったりすると生徒に説明するのも困難だったりするので、そういうものは外していきながら、一番残念な人を決めた後に、なぜ兼好がこういう人物を書いたのかを考えていく際のこととも考え、多様な視点でおかしさの根拠を捉えさせるために以下の六つを選定した。

第45段「公世の二位のせうとに良覚僧正と聞こえしは」

第47段「在る人清水へ参りけるに」

第52段「仁和寺にある法師」

第53段「これも仁和寺の法師」

第89段「奥山に猫またといふもの」

第236段「丹波に出雲といふ所あり」

この中で第47段の人物は、一見変わり者でクスツと笑えても他の話と違い、「人として残念」ということにはならないものだが、他と何が違うのか、残念な人として兼好がやや批判的に見ているのはどういうことなのかを考えるため、あえて入れることにした。また、ここには入れていないが、兼好のものの方が明確に表れている137段も単元の始めに冒頭部分と合わせて読み、筆者の思いを考えさせる上で参考になるようにしている。

選定した六つの章段を「古典文学全集」等から打ち直し、文字や言葉の抵抗を除去すべく必要な漢字にルビをふり、口語訳付き、いくつかの言葉に【注】付きの「徒然草～ちょっと残念な人々～」というタイトルの題材集（資料1）を準備した。

(2) 現代文を読むような学習活動とゲーム的な要素「大賞選び」

題材として用意された六つの章段を口語訳を参考にしながら、それぞれの話のおかしさ、愚かさの特徴を読み比べていく際に、読みの課題として、生徒自身の読みの視点と根拠で、「どの人物が一番残念な人か」を決めるという現代文の作品でもやるような比べ読みや人物像の読み取りに関わる活動を単元の軸とした。また、ここで単にどの人物が最も残念かを決めるだけでなく、その人物にどんな残念さなのかを表すような「○○○大賞」と賞名をつけ、生徒たちを大賞選定者という立場とし、選んだ人物に賞名をつける楽しさやだれがどんな名前の大賞として選ばれるか発表が楽しみとなるような要素も入れた。こうしたことで生徒たちは古典を学習しているという特別の意識がなくなり、楽しんで作品に対していけると思われる。

(3) 話し合い活動による交流で多様な視点《本校のコミュニケーション・デザイン科との関連より》

「協働的な課題解決の力」を育てるために、残念な人大賞を決めるに際し、小グループで観点や根拠を明確にして残念さを話し合い、その結果をクラス全体で交流する場を設けた。これによって国語としての読みの視点や考え方の違いを共有し、読みの幅と深さをつけることも目指しているものである。小グループの話し合い活動やクラス全体の交流の場を設ける活動は、思考を深めるための【対話・協働】や【伝達・発信】の土台となるべきものである。コミュニケーション・デザイン科での多様な視点で考えたり、様々な立場や考えを受け入れる話し合いをする上での態度や、よりよいコミュニケー

題材集
表紙

二部作新刊 () (組) (番氏名)

「徒然草」
ちよつと残念な人々

「徒然草」に出てくる「ちよつと残念な人々」をいくつ読んでみましょう。
古真の世帯の残念な人々とは……。

年級別 (市川)



(資料1
題材集)

() (組) (番氏名)
「徒然草」に出てくるちよつと残念な人々

① 第四十五段 公世の二位のせうとに良覚僧正と聞えしは

公世の二位の兄に、良覚僧正と聞えしは極めて腹あしき人なりけり。坊の傍に大きな榎の木がありければ、人「榎木僧正」とぞ言ひける。この名しかるべからずとて、かの木をきられにけり。その榎のありければ、「きりくひの僧正」と言ひけり。いよいよ腹立ちて、きりくひを振り捨てたりければ、その跡大きな榎にてありければ、「榎池の僧正」とぞいひける。

【現代語訳】

藤原公世(ふじわらのきんらの兄に、良覚僧正といわれる方がいたが、とても怒りっぽい人だ。僧坊(僧の住居)のすぐそばに、大きな榎の木があったので、人々が良覚のことを「榎木僧正」と呼んだ。(すると)このあだ名はけしからぬといえて、この榎の木を切ってしまった。しかし榎の木が残り残ったので、人が「きりくひの僧正」と呼ぶと、良覚はますます腹を立てて、切り株を振り出して捨ててしまった。その振り出した後が大きな榎になったので、人々は良覚を「榎池僧正」と呼んだということである。

② 第四十七段 在る人清水へ参りけるに

ある人、清水へ参りけるに、老いたる尼の行きつれたりけるが、道すがら、「くさめくさめ」と言ひもて行きければ、「尼御前」何事をかはのたまふぞ」と聞ひけれども、いらへもせず、なほ言ひ止まざりけるを、度々問はれて、うち腹だちて、「やや、鼻ひたる時、かくまじなはねば死ぬるなりと申せば、鼻ひ雪の、比叡の山に墜にておはしますが、ただ今もや鼻ひ給はむと思へば、かく申すぞかし」と言ひけり。

有り難き、志なりけんかし。

【現代語訳】

ある人が、京都の清水寺に参拝したところ、年老いた尼僧と途中で遭運れになり、尼僧がその道の中で「くさめくさめくさめくさめ」といって、生命が危ないように囁く呪文を言っているのを見た。まじないのようなのを【】と言いながら歩くので、「尼御前、なにをさういって言っているのですか?」と尋ねたけれど返事が無い。なお尼僧が言ひやまないで、何事も聞かずに、尼僧は腹を立てて「ええうま、くしゃみやました時、(市川)雨のうなまじないを囁かないと死んでしまつと世間思いうから、私がお育てした若宮で、比叡山で禊敷をして修行をしている人が、くしゃみやましたらと思つと、このうちに申し上げてくれるのです」と言えた。なかなか有り難ない立派な心かけではないだろうか。

ションを行うための関係作りなどが、「残念な人大賞」を決めるにあたっての、「残念」ということのとらえ方に関する発想や読みの視点の多様性を生み出したり、それを受け入れ、協働する集団育成に役立ち、話し合いをより活発に意義あるものにするのが期待される。

(4) 言語的な面の力をつけていくための配慮

残念な人々シリーズに入る前に、単元の始めに、冒頭部分と137段の兼好のもの見方が明確に表れている数行を音読し、暗唱することを個人の課題としたり、それぞれのグループで大賞として選んだ話については、グループで選んだ大賞発表の際に責任をもって古文の音読をすることをグループの課題にしたりと音読もしっかりするような機会と場を設定した。教科書に掲載されている「仁和寺にある法師」を中心に確認しておきたいよく出てくる基本的な古語についてはまとめて、確認する時間をとった。(学習計画第六時) また言葉に対する感覚を育ていけるよう大賞名をつける際に、根拠を明確にする言葉の選択をするよう促すなど、言語的な面も育てていくようにも組んだ。

4 単元の計画 (全6時間)

第一時 「徒然草」と兼好法師を知る・単元の学習計画とゴールを知る・冒頭文と137段を読む。

第二時 「徒然草」のちょっと残念な人々が出ている六つの章段を読む。①(古文音読と口語訳の確認)

第三時 「徒然草」のちょっと残念な人々が出ている六つの章段を読む。②(古文音読と口語訳の確認)

最も残念だったり、印象的だったりする章段の人物を考え、選ぶ。

第四時 グループで選んだ大賞名を決め、発表の準備。グループの発表。

グループでの話し合いを全体で共有し、意見を交流し合う。

第五時 単元全体のまとめ～徒然草を書いた兼好の思い(メッセージ)に迫る～

第六時 教科書に掲載されている「仁和寺の法師」の話を詳細に読み解く。

Ⅲ 実践報告

ここではこの単元の学習活動の柱ともいえる「残念な人の大賞」選びとその交流や、結果の検討と兼好の思いを考える第四時・五時を中心に報告することとする。特に第四時については公開研究会で授業をし、その後検討会でリフレクションも行ったので指導案も併せて掲載しておく。

1 第一時 「徒然草」と兼好法師を知る・単元の学習計画とゴールを知る・冒頭文と137段を読む。

資料1の題材集「徒然草～ちょっと残念な人々～」を配布し、その1ページ目に掲載した本単元の学習計画と学習のゴールを示した学習ガイダンス(資料2)に基づいて、単元の学習活動やゴールを確認後、始めの学習課題である冒頭部と137段の暗唱に向けて音読練習に入った。軽くどんな意味か、作品全体の中でどういう意味がある章段なのか授業者が説明したが、ここではとにかく古典の文章のリズムと感覚を身体になじませてしまうことが目的なので、後はとにかく音読を繰り返す。2年生では「枕草子」の暗唱もやっているの、生徒たちの音読はリズムにのって声もしっかり出ている。その後できるだけ生徒たちが作者兼好や徒然草に書かれている事柄を身近に感じられるよう、兼好法師の住まいのあった京都の地図、六つの章段の話に出てくる寺社の建物や生活用品の写真等の視覚的な資料をプロジェクターで見ながら兼好法師と「徒然草」について文学史的な基本事項の確認をする。また、僧侶や寺社がよく登場するので、作品理解を助けるために当時の社会と、その社会において寺社や僧侶がどのように見られている存在だったのかもここで簡単に触れておいた。「ちょっと残念な人々」というタイトルや「残念な人の大賞を決める」というちょっと古典らしくない活動に生徒たちが反応し、興味を持っている様子が見えた。題材集にも暗唱用のプリント(資料3)、兼

好についての書き込みシート（資料4）とあちこちに教師が準備した「つれづれくん」という名のマスコットキャラクターが登場しているので、シートを受け取るときに、生徒たちからクスッという小さな笑いがもれる。このキャラクターも学習の和やかな雰囲気作りに役立っているように感じられた。「意欲の喚起」という点で古典の単元学習として良いスタートといえるであろう。

2 第二時・第三時 「徒然草」のちょっと残念な人々が出ている六つの章段を読む。①②

最も残念だったり、印象的だったりする章段の人物を考え、選ぶ。

ここから第三時の前半までは、ひたすら「徒然草」の六つの章段を読んでいく作業である。授業では教師が古文である原文を音読し、必要なところに解説をしていくという形でどんどん読み進めていくので、突然、古文を読んでも話の内容が理解しにくいと予想されるため、話の概観をつかませるよう家庭学習として口語訳の方だけ読んでくることを課した。内容がある程度頭に入っていれば、古文を読むときのハードルが少し下がり、余裕を持って取り組める。特に本校では帰国生徒も受け入れているので、こうした学習の手順や手立てを大切にしている。六つの章段を読み終わったらいよいよ、六つの話を比較し、どれが一番残念な人なのか大賞を決める活動に入っていき、その際、それぞれの話の内容でよくわからない点はなかったのか質問し確認する時間を取った。まずは個人でどれが一番残念かを決めワークシート（資料5）にその理由も書き込み、その後グループで大賞を決めていく活動に入った。授業中に机間巡視すると個人で選んで書かれているものは、クラスによって差があったが、「仁和寺にある法師（52段）」「丹波に出雲という所あり（236段）」といった章段を選んでいる生徒が多かったようだ。

3 第四時 グループで選んだ大賞名を決め、発表の準備。グループの発表。全体意見を交流し合う。

(1) 本時の目標

- ① 六つの章段から選んだ「一番残念な人」とその大賞名について、根拠を明確にして説明する。
- ② 他の班の選んだ観点や考え方について交流し、読みの視点を広げる。
- ③ 班の活動に協力的に参加し、えらんだ章段の古文をすらすらと音読する。

(2) 本時の展開

	学習活動	指導上の工夫・配慮 / 【CD科との関連】
課題設定	○前時の確認と本時の学習内容の確認 徒然草の「ちょっと残念な人々」の話から、一番残念な人大賞を決めて、発表会をする。	・班での役割分担を確認。 *当時の仁和寺や法師というものがどういう存在であったのかは前時までに確認。
課題追究	○各班で残念な人大賞を選び、その大賞名をつける。 ・グループで根拠や理由を明確にし、決めた残念な人大賞に根拠や理由にふさわしい、ぴったりの大賞名をつける。（話し合い） ・発表の準備（説明のまとめと選んだ章段の古文の読みの練習をする） ○班で選んだ「残念な人大賞」を共有し、交流する。 ・大賞として選んだ章段のタイトル・大賞名を黒板に掲示し、各班発表。 ・発表班以外は、選んだ理由としての視点や捉え方のユニークさやいいと思った大賞名などをメモしながら聴く。 ・コメンテーターが他の班の大賞名や選んだ理由等についての感想を述べる。 ・大賞名としてどれが一番ぴったりかクラス全体で考える。	【対話・協働】 ・前時にスムーズに大賞が決まったグループも根拠や理由が明確か、それに見合った大賞名になっているか吟味させる。 ・大賞に選んだが話は責任を持って紹介するために、しっかりと音読ができるよう練習することを促す。 ・*2発表の仕方は事前に確認しておく。 （音読・選んだ章段・根拠や理由の説明・大賞名） 【伝達・発信】 ・ワークシートに簡単に簡条書きでメモする。 ・書くことより聴くこと・考えることの方に集中するよう促す。 ・選んだ根拠と大賞名の融合性に着目させる。 ・同じ章段を大賞に選んでいても根拠とする視点の相違があることに気付かせる。
省察	○学習のまとめ ・大賞に選ばれた話の根拠の共通点や、選ばれなかった話の共通した特徴などを考え、意見を出し合う。 ・後日、兼好が「なぜこうした章段の話を書いたのか」「兼好のメッセージとは何か」を考えるという予告をする。	本時の学習が筆者の思いや考えに迫る 授業へとつながるよう意識付けをしておく。

資料2
学習ガイダンス

徒然草に出てくる「ちよつと残念な人々」学習ガイダンス
作品を読んで「残念大賞」を決めよう！

★チよつと残念な大賞名がつけられると学習の終わりに兼好法師からのメッセージが来るかも……

- 兼好法師と徒然草を理解する。
- プリントされた「徒然草」の六つの章段の話を読み、(古文の書評、口語訳の補記)
- 各個人でどれが一番面白かったり、印象的だったりするか考え、選ぶ。(理由もメモ)

二 「二」からグループで学習

- グループでそれぞれ章段の話を確認する。意味の不明確なところ、疑問に思うことを質問する。(グループのメンバー、先生)
- 意見を出し合い、グループで「一番残念だ」と思う段として、大賞を決める。
- 話の内容や選んだ理由にびつたりする大賞の名前をつける。(〇〇大賞)

★必ずその根拠を述べ、互いが納得し、なぜそれが大賞か他の班にも納得できる説明をする。
★話し合いがまとまらず、大賞も決まらなかったら、③のための準備をする。(書評課題・説明)

三 「三」から全体

- 大賞発表
 - 自分たちの選んだ章段を述べ、その段の原文(古文)をグループ全員で書読
 - 大賞の名前・名前の由来と選んだ理由や根拠を説明する。

*説明の仕方
〇〇班は、「第△段の……」という話を「××大賞」に選びました。
その理由は……
またこの大賞の名前は「……」ということからつけました。

2年国語(市川)

課題
秋休み中に「徒然草」に出てくる残念な人々(このプリント)の1~6の各章の口語訳を必ず読んでおく。

【グループの役割分担】
進行
コメンテーター(他の班の発表に対して)
記録
発表(二・三)

資料3
暗唱用プリント

期限 十一月二十五日(金)

徒然草 (一) (組) (番) (氏名)

吉田兼好

序段(冒頭)

つれづれなるままに、日本らし、現にむかひて、
心に移りゆくよしなしごとを、
そこほかとなく書きつれば、
あやしうこそ、ものぐるほしけれ。



一三七段 兼好の興遣

花は盛り、月は隈なきものみ見るものは、
雨に向かひて月をこひ、たれこめて春の行方知らぬも
なほあはれに情け深し。嘆きぬべきほどの情、
散りしをれたる魚などこそ、見所おほけれ。



資料4
兼好についてのシート

2年国語(市川)

二章(四段)「徒然草」(一) (組) (番) (氏名)

「徒然草」の作者、兼好さんってどんな人?

・生きた時代(年) () 時代

・作品名(「徒然草」の「徒」は「……」) () 時代

・多岐にわたる内容(「徒」は「……」) () 時代

・本名(兼好)

・吉田兼好の () の子に生まれ、朝臣に任じたが、後 () して出世を断れた生活を送る。

・中国の思想によく通じ、古詩や和歌への理解も深く、歌人としても著者であった。

・住まいは京都の東山(今、東山区)で、あつ () (寺)の近くだった。

・兼好法師の生きた時代

・如夢の人で、はやっていったが

として生活すること

が定まっていた

が定まっていた

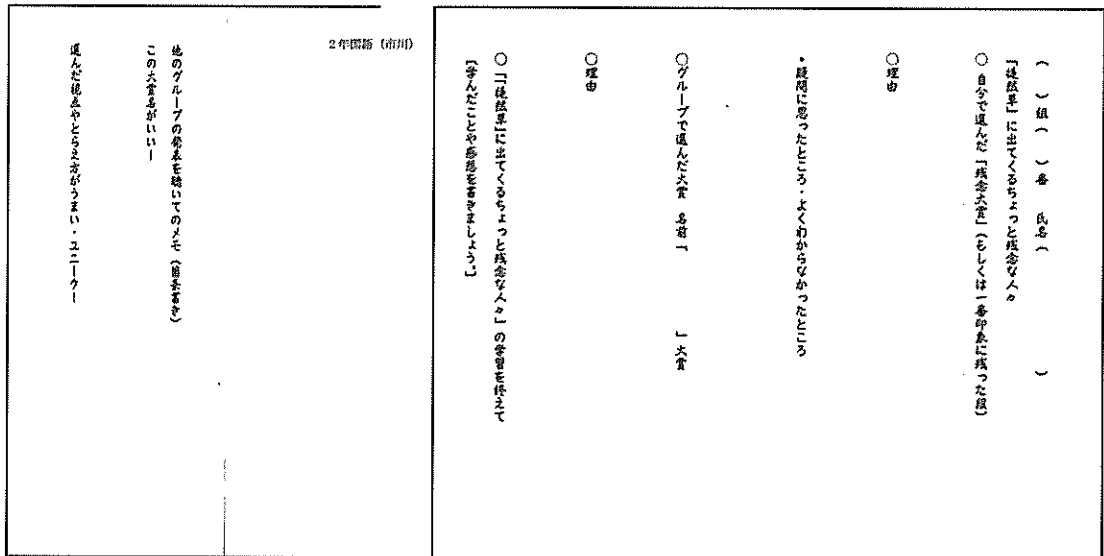


★、当時の「トレンド」な「インテリ」でどこかな。

(3) 本時の評価

- ① 六つの章段から選んだ「一番残念な人」とその大賞名について、根拠を明確にして説明している。
- ② 他の班の発表を聴いて、自分たちのものと比較し、考えや感想を書いたり、発言したりしている。
- ③ 班での話し合い活動に協力的に参加している。
- ④ 選んだ章段の古文の音読がすらすらとできている。

資料5



それぞれのグループは、事前に示した発表の仕方(資料2に記載)に基づき、自分たちの選んだ章段の音読後、大賞名とその人物を選んだ根拠、名前の由来等を説明する。まず、発表する際、発表をしている生徒たちも聞いている生徒たちも楽しそうであったことが印象に残っている。この時間の1クラスは、公開授業であったのでたくさんの参観者がいらしていたが、授業後の検討会でも「生徒たちが楽しそうだった」という感想が出されていた。自分たちが大賞に選んだ章段は、発表の際に責任をもってお披露目するため「しっかりと音読する」ことについては、授業以外に休み時間に練習したり、あやふやなところを質問にきたりという姿が見られ、思っていた以上に自主的に音読練習に取り組んでいた。六つの章段の音読の一斉練習の時間はあまりとっていないが、元気よく、よく読めていた。自主的に意欲的に取り組めたこととこれまでの積み重ねが力になっているのであろう。

六つの章段の話の内容を比較し、読み取っての大賞選びと大賞名をつけることについては、その話(人物)を選んだ根拠を明確にし、それを活かした大賞名をつけるという点を生徒たちはよく踏まえて、ユニークな発想で様々なアイデアを出していた。具体的に「徒然草各クラスの残念大賞 発表結果」(資料6)から選んだ大賞をみていくと、自分の思い込みによって、目的が果たせなかったり予想はずれの結果となったりしている(第52段や236段、89段)ところを「残念さ」としている生徒が多かったようだが、同じところを選んでも大賞名では観点・視点の違いが表されている。その大賞の付け方を分析してみると、残念な結果と理由に着目している班にわかる。数的には結果の方に着目している班が多かったが、「思い込みが激しいで賞」「酒の飲みすぎには気をつけま賞」「プライドが高すぎたで賞」など理由に着目している班もあった。また登場人物自身の立場でつけた班と、第三者の立場としてつけている班との違いもあった。第三者の立場としてつけている方が多かったが、中には、第三者としてその場に自分がいたら言っておきたいという設定でつけた「そこに道があった

で賞」「案内が必要で賞」というのもあった。大賞の付け方の視点の違いで同じ話であっても「案内が必要で賞」「そこに道があったで賞」となったり「自己満足大賞」「プライドが高いで賞」とかなり受ける印象の異なる名前となっている。様々な慣用句をうまく使ったり、本人のつぶやきのような言葉にしたりと大賞の命名にも工夫が表れていた。

各班の発表後、全体で互いの大賞名について意見を交流していくときに、生徒たちも互いの大賞名を見ての感想を述べる際にも自分たちと違う読み取りの視点や発想のユニークさを指摘した発言をしていたが、教師の方からも補足的にこうした大賞の付け方の違いも取り上げ、生徒たちに多様な視点と発想を認識させた。意見の交流の場では生徒たちが活発に発言し、楽しく授業に取り組んでいる様子が見られた。

「大賞に選んだ根拠を明確に」「交流し、読みの視点を広げる」というこの時間の学習目標もほぼ達成できていると言えよう。

4 第5時 単元全体のまとめ～徒然草を書いた兼好の思い(メッセージ)に迫る～

中学生の段階で「徒然草」という作品や作者の思いに深く入っていくのは、高度なことで適切とは考えられず、逆に「難しい・めんどろ」という印象を持ってしまう恐れもあるので、あくまで今までやってきた学習活動での生徒たちの思いを大切にしてお考えを交流させ、「徒然草をやって楽しかった」という思いが損なわれないよう、高校での学習への橋渡しになるようにということを考えて授業を進めた。

まとめとして、兼好法師はなぜこうした話を書いたのかに迫るにあたってまず「どの班も47段は選ばなかったのはなぜか」と他の話との相違点と「いくつか大賞に選ばれた人物に共通していることは何か」と選ばれた話の共通点に着目させ、以下のような手順で整理した。

Q1 「残念な人・残念でない人の違いは？」

- A 大賞(残念な人): 過剰な自信やプライド・うわさに振り回される・自分をコントロールできない。
世間の目・名声(社会的権威)等に執着
- B 大賞でない(残念でない人): 一見変わっていてもひたむき、一途・人間味(情)がある

【兼好法師】残念な人で選んだ人物(ここでは僧侶)には、人格が備わっていない人として、批判的。

Q2 「なぜ兼好法師は僧侶のこうした失敗談を書いているのか、世間一般の僧侶に対する見方とは？」

(「徒然草」の他の章段でBの要素がある場合、僧侶であっても褒めて肯定的に書かれていることを紹介)

【世間一般の見方】寺社・僧は当時の社会では権威あるもの。僧侶は偉い人・人格のある立派な人

【兼好法師の提言】(世間一般の見方に対して)

「僧侶が立派な人とは限らないよ。そうでないこともあるから、いろんな視点でしっかりと見ていかなくては」

Q3 「始めに読んだ『137段 花は盛りに』と僧侶について書かれたこと共通していることは？」

137段でそれぞれの季節の良さは、一般的に良いものとされていないものでも

美しさや良さがあると述べている。

【決めつけた見方をせずに、様々な視点で、自身の目でしっかりと見ていくことが大切】

さらにそれぞれのクラスで出た大賞名の一覧とこの時間に一緒に考えた兼好法師の思いを踏まえて兼好法師からの手紙(教師作成)という形で生徒たちに渡し、まとめとした。兼好法師からの手紙を読み始めるときに「どうやって兼好法師から手紙がもらえたんですか。」という質問があったり、読んでいる際に生徒たちからクスッという小さな笑い声を起きたりしたが、書かれてある内容は受け止

めてくれているように見受けられた。最後に生徒たちにこの学習の感想を書いてもらったものもいくつか抜粋（資料7）して紹介し、単元のふり返しとした。

まとめでは、これが作者の意図だとか、伝えようとしたものということを明確に打ち出すというより、生徒自身の読みやとらえ方にゆだねるようにと単元全体をデザインするときに考えていたのだが、結果的には「徒然草」作品全体としてとらえさえないという思いから、作者が作品に描こうとしたことについて、少し方向づけをしすぎたのではないか、中学生の段階で兼好法師の「物事を多面的にとらえることの大切さの提言」までもって行ってよかったのかと反省している。

第六時の「教科書に掲載されている『仁和寺の法師』の話を詳細に読み解く」についてはⅡ構想の3(2)の④参照とし、ここでは記述しない。

資料 6

二年 () 組 () 番 氏名 ()

「徒然草」各クラスの残念大賞 発表結果
 「徒然草」中から選んだ、ちよつと残念だったり笑えたりする六つの章段のお話の中で一番残念な人は、どのお話が、誰で選んで大賞を命名しました。みんなのユニークな発想に、兼好法師もご満足なようですよ。

松組

第五十二段
 案内が必要で賞(A班)
 思い込み激しい大賞(C班)
 スタスタで賞(G班)
 自己満足大賞(H班)

五十三段

酒の飲みすぎには気をつけま賞(B班)
 これもまた残念大賞(E班)

第八十九段

思い込みが激しい大賞(F班)
 自家自得大賞(D班)

蘭組

第五十二段
 プライド高いで賞(A班)
 そこに道があったで賞(G班)
 マヌケで賞(H班)

第二百三十六段

嘘で賞(B,C合体班)
 流す涙は無駄だった大賞(D班)
 「穴があったら入り大賞」(E班)
 口癖がSSSS賞(F班)
 ・うろたえる様子がかしい思いの意

菊組

第五十二段
 自尊心によって心残りで賞(E班)
 今でもいるで賞(D班)

五十三段

ザ・モストつれづれつるすってん大賞(F班)
 やつちまつた・・・大賞(B班)

第八十九段

さいきよう法師大賞(G班)
 イマジネー賞(H班)
 やらかしちやった大賞(A班)

第二百三十六段

穴があったら入り大賞(C班)

梅組

第五十二段
 骨折り損の草臥れ儲け賞(H班)
 見栄っ張り大賞(A班)
 プライドが高すぎたで賞(G班)

五十三段

人生様になつちやつたねえ大賞(E班)
 第八十九段
 ベットに泣かされた大賞(C班)

第二百三十六段

かまぼこ大賞(F班)
 ・かまぼこほしい、でも複雑な意を込めて、
 聖海上人、少々恥ずかしかったで賞(D班)

2年国語(市川)

兼好法師からの手紙

平成の中学生が、私の書いたものを楽しんで読んでくれているよ
 うて、喜ばしいことだ。中には古文の「かたい」イメージが変わっ
 たという子もいるように嬉しい限りじゃ。それに、古文を積極的に
 読んでいくこうとしている様子も見られ、未来に希望も感じるとい
 うものだ。

私の生きていた時代は、常に死が身近であったし、社会も混乱し
 ておつて、権力や社会的名声や価値観なども、いつ変わるかわから
 ない大変な時代だった。そんな中で、人間の世をどすくに変わるも
 の、人の命令どはかないもの、いわゆる「世字親」というものが流
 行っておつた。だが、私は、世の中を肯定的にとらえず、いつ死ぬ
 か、いっどうなるかわからない人間だからこそ、生きていく今を大
 切に精一杯生きていくこうと肯定的に考えたのじゃ。どうだ、なか
 かなものじゃ。

そのためには、何故人として、一番大切なのか、自分自身の目で
 しっかりと見極め、考えることが必要だった。だから、世の一般的
 な考え方や、常識的な一面の全てをせず、くもりのない目で、
 様々な視点から物事を見ていくことが必要じゃった。そうしなけれ
 ば人として大切なことや、ものごとの真実は見えてこないものじ
 ゃ。それに、人間、生きていられるのは限られた短い時間なのじ
 ゃから、一面的な、型にはまった見方や考え方は、この世に存在す
 る良いものを、できるだけたくさん見つけることは、できないうじ
 ゃ。せつかく生きていくのに、それはもったいない。

出家して世の中と距離をおいて人間を見てみると、いろんなもの
 が見えてくるので、現実の世の人間が、情緒にも見えてくることも
 あるものじゃ。私の生きていたころには、このセンスに共感してく
 れる者はさほどいなかったものだが、私のちよつと風刺のきいたセ
 ンスの良さを、何百年もたった平成の若者が共感しているのは、感
 心なことだ。まあ、私が、見出して書いたものは、時代を越えて伝
 わるようなもので、そういうことが存在するということを私も実感
 できた。

みながつけた大賞の名前もなかなかのセンスを感じざるぞ。
 高校での再会も楽しみにしておるぞ。

吉田兼好

追伸

暗唱の期日が迫ってきておるが、そちらは大丈夫かな。



2年国語(市川)

資料7

「徒然草」残念な人々の感想(一部)

二年菊組

徒然草の著者である鴨居和宣は、その著書の中で、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草と残念な人々の感想(調)

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

徒然草の著者は、世に於ける人々の様々な姿を、鋭く観察し、辛辣な筆で描き出している。...

Ⅳ 考察と課題

この単元での取り組みについて考察するにあたって、生徒たちの単元終了時の感想と公開研究会での授業後の検討会としての授業リフレクションとを取り上げる。この二つは成果として見られる事象に共通するところが見られ、また私自身の考える授業の成果や課題とリフレクションでの参加者の感想は重なるところがあり、この二つを参照することでより客観的な授業の考察になると考えられる。

1 生徒たちの感想から

生徒たちの単元終了時の感想（一部抜粋したもの）を単元の学習のねらい①～③に照らし合わせて以下のように分類した。

生徒たちの感想を一部抜粋してまとめたもの

① 「読み物として楽しんで読む態度を養う。」について

- ・もっと読みたいと思った。結構おもしろい授業だったので良かった。
- ・冒頭の部分だけ読んでもあまり楽しくないが、残念な人々を読むと、とてもおもしろいです。授業も楽しく参加できました。またこういう感じの授業がしたいなあと思っています。
- ・難しそうで真面目な話なのかなと思ったら、意外とおっちょこちょいな人が何かをやらかしたりして面白く楽しく読めました。
- ・学習班で選んだ「残念大賞」の発表もとっても楽しかった。
- ・お話の面白さは人によって様々なとらえ方があってそれを聞くのも楽しかったので他のお話についても友達と話してみたいです。
- ・その人（登場人物）がそこにいるような臨場感があり、思わず声をかけたくなるような文章だと思った。
- ・徒然草の他の段も読んでみたい。

② 「古典作品に表れたものの見方・考え方に触れ、作者の思いを想像する」について

- ・徒然草には色々な種類の残念さがあった（書かれていた）。
- ・兼好法師はお坊さんの固定観念をなくしてくれたすごい人だと思った。
- ・兼好法師は様々な物事を多面的にとらえていることが分かった。
- ・兼好法師は様々な視点から物事を見ていて立派だと思った。
- ・兼好さんは、広く多面的な視野を自分自身で持つべきだと伝えている。説得力がある。
- ・残念な人に共通することは「世間の目」を気にしているというところで、そこが残念。
- ・兼好法師は、人々の残念なところと同時に、偏見のようなものをうち消すような話を書く人のような気がする。
- ・残念な人の中でも52、53、89段が選ばれる理由として現代社会にも共感できる所があるからだ考える。

- ・当時の世の中の目は意外と現代の世の中の目と似ているなと思いました。
- ・いつの時代も変わらないそんな人の心がわかって面白いと思いました。
- ・現代社会を見直すきっかけにもなるなあと感じた。

③ 「互いの捉え方や考えを交流し、読みを深めたり、広げたりする。」について

- ・残念ということ一つでも様々なとらえ方があり、学んで楽しかった。
- ・残念な人々では自分だけは考えることのできなかつた視点や発想が沢山あり、驚いた。視点を変えることがいかに大切か実感した。
- ・各班それぞれ、内容を詳しく読み解いて大賞名を考えているのが印象的。
- ・様々な観点から見ることができたため、いろいろな意見が発見できて、より詳しく深く学習できたのとても楽しかったです。
- ・（大賞名は）発表を見るとそれぞれの班の発想がユニークで個性的だと思う。
- ・私達は読んでいる側、つまり第三者から見ての題名をつけたけれど、本人（登場人物）の気持ちになって題名にするのは思いつかなかった。インパクトがあった。
- ・他の人の発表を聞いているうちに他の章にも面白いと興味を持つようになりました。

- ・作者である兼好法師の美意識と残念な人々の話とつながりがあることに驚きました。
- ・私も相手の一部を少し知っただけ、全てを知った気にならず、しっかりと内側まで知っていきたいと思う。とても面白い授業でした！！
- ・多くの視点から物事を観察しなければと考えた。クラスで討論するときなどにも思い出してよりよい意見を言えるようにしたい。

2 授業リフレクションから

本単元の第四時は、本稿の公開研究会での授業で実施し、授業後の検討会では、助言者である澤本和子先生がメンターとして進行されるリフレクションという形でふり返りを行った。授業リフレクションは、参観した授業がどんなものであったか、よりよくしていくことの課題は何かを参加者全体で考えていくという授業のふり返りであった。まず、参観だけでは見取りにくい授業の意図や単元のデザインにおける工夫点等についてメンターと授業者がやりとりをし（対話）、対話を聞くことによって参加者全員が単元・授業がどのようなものであったかを共有し明確にする。次に、参観者は一言感想・質問を書いた付箋紙を出し、メンターが授業の流れや内容によって付箋紙を分類・整理し、全体で確認したいことや提案したい内容の付箋を取り上げ、方向づけをする中で集団リフレクションをする。

全体の意見が生かされ、共有ができるというメリットやメンターが協議自体を収束し、深めたり方向付けたりすることでよりよい授業づくりをしていくための建設的なふり返りになっていたと感じた。授業リフレクションの参加者の感想の付箋紙の主なものを、当日の澤本先生の分類に従って整理すると次のようになる。

参加者の感想の付箋より * () は筆者による

【導入】 残念な人々という切り口（キーワード）生徒が意欲を持って楽しそう。

音読	意欲的に取り組み、しっかりできている
大賞を選ぶというしかけ	せっかくだからもっと遊び的な要素に徹した演出もあり（提案）

【展開】 明確に根拠を示した説明ができている。
 生徒たちの意見が的を射ていた。理解度が高い。
 大賞名が工夫されている。
 小グループと全体での意見のやり取りが頻繁。
 音読がしっかりできている。
 グループでの折り合いの付け方は？（質問）

【まとめ】 想定外の話し合いで意見が沢山出た時の対応・軌道修正など（課題）

【それ以外】

単元の目標・題材の設定	作品を読み味わうことにつながるもの この六つの章段だけで徒然草という作品を扱ったことになるか。 (課題)
評価に関すること	単元の目標は「古典へのプラスのイメージを持つ」は達成された？ 兼好がなぜ書いたのかに今後どう迫るか？

3 成果

1の生徒たちの感想から、生徒たちが楽しんで古典作品を読み、内容や作者について考え、作者の考えに共感する様子や、交流によって残念さのとらえ方や大賞名の付け方の発想の多様性に気付いていることがうかがえる。中には他の章段も読んでみたいという意欲を持っている生徒も見られ、この単元のねらいである「① 読み物として楽しんで読む」「②人物像や話の特徴をとらえ、古典作品に表れたものの見方・考え方に触れ、作者の思いを想像する。」「③互いの捉え方や考えを交流し、読みを深めたり、広げたりする。」についてはほぼ達成できたといえるであろう。

生徒たちの反応や感想からだけでなく、リフレクションでの参観者の感想にも「残念な人々」という切り口(テーマ)による題材の選定によって、生徒たちが意欲的に能動的・主体的な読みの学習に向かっていたこと、「大賞を選ぶ」という具体的な活動によって、各々が読みの視点や根拠を明確にするしつかりとした内容の読み取り・読み味わいとなっていたことが指摘され、「とにかく生徒に興味をもって作品を楽しんでもらいたい」というところを優先して「ちょっと残念な人々」という切り口での徒然草の中からの六つの「題材選定」は、本単元の試みの中で一番の成果であったと感ぜられる。

「残念な人々」というテーマでの徒然草の題材選定や設定も、中学生に細かい説明は抜きにして、現代語付きの六つの章段を読ませるといった量的に多くの古文を読ませることも、古文の作品から残念な大賞を決めるといったゲーム感覚の活動も「試み」としての単元であったが、古典の学習も題材や学習活動の工夫をすれば、生徒たちが意欲的に古典へ向かい、作品を楽しんで読み味わえるということを実感でき、そこにこの試みも意義があったと言える。自身の今後の古典指導の取り組みへの励みともなった。

4 課題とその考察

最後の兼好の思いに迫るところでのまとめの仕方と徒然草の中での題材の選定の仕方が、今回の試みの中で今後再考していくべきことであろう。

まとめでは、中学生に徒然草の作者吉田兼好の人生観や作品に書かれている思い全てを明確に理解させることは大きすぎることなので、権威や常識にとらわれず自分自身の目でしっかりものごとをとらえる兼好の人生観や考え方の入り口に立てればよいと考えていたが、Ⅲの実践報告の4でも触れたように、作者兼好法師の思いについて、どこまで、どのように迫るか、そのかね合いが難しいところである。またそのための発問の仕方やまとめの内容にも検討の余地がある。

このまとめをどこまでどのように持っていくかは、単元設定の始めの題材選びにも関わってくることである。「生徒に興味をもって作品を楽しんでもらいたい」ということを優先した点においての題材選定は、成果のある有意義な題材であったといえるが、徒然草の作品全体として作者兼好の書こうとしたものをとらえることになると、この六つの題材で良いのかという検討の余地はあるだろう。実際に今回の学習でも、兼好が単に冷ややかで攻撃的な批判者というのではなく、ものごとを多面的にとらえ、鋭くもしなやかな考え方をしていたことや、無常な世を諦観せずに、無常な世である故に今を大切に精一杯生きようという肯定的な提案をしていることなどもとらえようとする、他の章段も参照として紹介する必要がある。兼好の考え方・生き方を考えさせるには、六つの「残念な人々」の話以外の章段の必要性も考えられる。そう考えると、今後、題材として「ちょっと残念な人々」だけでなく「ひたすら一途な人々」「ちょっと変わった人々」などというテーマでの選定も考えられる。または、クラスの生徒を半分に分け、それぞれが「ちょっと残念な人々」と「ひたすら一途な人々」という別のテーマの題材で読み、全体交流の場で両方の話を比較した上で、兼好が作品に書こうとしたことに迫るといった方法もあるかもしれない。いずれにしても今回は「試み」としての題材の選定であるので、今後どのような切口でどんな題材選定をしていくか検討していくことを考えていきたい。

【参考文献】

- 日本古典評釈・全注釈叢書「徒然草全注釈」(安良岡康作 著) 角川書店(1969年)
『新訂 徒然草』(西尾実・安良岡康作) 岩波文庫(2005年) / 新版「徒然草」—現代語訳付き—(小川剛生訳) 角川ソフィア文庫(2015年)
『兼好さんの遺言』(清川妙著) 小学館(2011年)
『徒然草』に描かれた「法師」(中田由記著) 筑波大学平家部会論集第12集(2007/12)